

はじめに

本テキストは、皆さんが無理なく基本をマスターし、かつ応用力を養成できるように編集してあります。

単元ごとに、知識を定着させるための例題と「解法と学習の手引き」があり、さらに問題を解く力を確実にするために、演習問題Aと演習問題Bが段階を追って配列してあります。

古典は知識の積み重ねが不可欠な教科です。本テキストの学習を通じ、正解へのプロセスを体得し、実力を確かなものとされることを願っています。

構成と活用法

本テキストは、次のように構成されています。

▼例題 各講で基本的な問題を出題しています。

▼解法と学習の手引き 例題の単語や語法についてヒントを示しています。わからない問題がでたときに役立ててください。

▼演習問題A 基礎力の再確認を目的としています。解けた場合も、そうでない場合も、正解に至るまでの過程を必ず確認しましょう。

▼演習問題B 応用力の養成を目的としています。例題・演習問題Aで学んだ文法・用語をどのように活用していけばよいかを考えながら、問題に向かうと効果的です。

◆ もくじ — 古典Ⅱ

1	和歌	2
2	物語	8
3	評論(1)	14
4	評論(2)	20
	プラスα 古典常識	26
	付録—文語文法要覧	28

例題

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

泉の大將、故左のおほいどのにまうで給へりけり。ほかにて酒などまあり、酔ひて、夜いたく更けて、ゆくりもなくものし給へり。大臣おどろき給ひて、「いづくにもものし給へるたよりにかあらむ」などきこえ給ひて、御格子あげさわぐに、壬生忠岑、御供にあり。御階のもとに、松ともしながらひざまづきて、御消息申す。

「かささぎの渡せるはしの霜の上を夜半にふみわけことさらにこそ

となむのたまふ」と申す。あるじの大臣、いとあはれにをかしとおほして、その夜、夜一夜大御酒まゐり、遊び給ひて、大將も物かづき忠岑も禄たまはりなどしけり。

この忠岑がむすめありと聞きて、ある人なむ「得む」と言ひけるを、「いとよきことなり」と言ひけり。男のもとより「かの頼め給ひしこと、このごろのほどにとなむ思ふ」と言へりける返り事に、

わが宿のひとむらすすきうらわかみむすび時にはまだしかりけり
となむ詠みたりける。

問一 傍線部 a の下に補う語句として最も適切なものを、次のア～カの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア さわぎたり イ さわぎたる ウ さわぎたれ
エ ものしたり オ ものしたる カ ものしたれ

問二 傍線部 b の説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 「うら」は恨みの気持ちこめて詠んでいることを表す。「わ」は名詞「我」、「かみ」は動詞「かむ」の連用形である。

イ 「うら」は「浦」で、水を手ですくう意味の「むすび」の縁語であり、「わかみ」は動詞「わく」の未然形に「み」がついて名詞化している。娘のみずみずしい若さを表現している。

ウ 「うら」は葉の裏を見せてゆれる「すすき」の縁語であり、「わかみ」は動詞「わく」の未然形に

10

出典

「大和物語」

平安時代、十世紀半ば頃の成立。作者は未詳。一七三段から成る歌物語で、前半部は当時の人々の物語、後半部は古歌をめぐる伝承的物語。伊勢物語→大和物語→平中物語という流れ。

重要古語

◇泉の大將⇨藤原定国。

◇左のおほいどの⇨左大臣藤原時平。

◇壬生忠岑⇨歌人、「古今和歌集」撰者の一人。

「み」がついて名詞化している。娘の、結婚にゆれ動く心を表現している。

工 「うら」は接頭語で、「うらわかみ」は形容詞「うらわかし」の語幹に「み」がついて理由を表す。

娘が結婚するには身も心もまだ若すぎることを表現している。

オ 「うら」は「占」で、「わかみ」は形容詞「わかし」の語幹に「み」がついて原因を表す。娘が結婚するにはまだ若いという結果が出たおみくじを表す。

問三 傍線部①「のたまふ」②「聞きて」③「言ひけり」の主語として最も適切なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア 泉の大將 イ 左大臣 ウ 壬生忠岑 エ むすめ オ ある人

① [] ② [] ③ []

解法と学習の手引き

太字部分の語句や語法の解説をヒントに例題の問題を考えてみよう。

泉の大將、故左のおほいどのに謙讓まうで給へりけり。ほかにて酒など尊敬まあり、酔ひて、夜いたく更けて、ゆくりもなくものし給へり。大臣おどろき給ひて、「いづくにもものし給へるたよりにかあらむ」尊敬なときこえ給ひて、

御格子あげさわぐに、壬生忠岑、御供にあり。御階のもとに、松ともしながらひざまづきて、御消息申す。

「かささぎの渡せるはしの霜の上を夜半にふみわけことさらにこそ

となむのたまふ」と申す。あるじの大臣、いとあはれにをかしとおぼして、その夜、夜一夜大御酒まあり、

遊び給ひて、大將も物かづき忠岑も禄たまはりなどしけり。

この忠岑がむすめありと聞きて、ある人なむ「得む」と言ひけるを、「いとよきことなり」と言ひけり。

男のもとより「かの頼め給ひしこと、このごろのほどにとなむ思ふ」と言へりける返り事に、

わが宿のひとむらすすきうらわかみむすび時にはまだしかりけり

となむ詠みたりける。

ポイント

問一 「こそ」の結びは何形か。また、傍線部aを含む和歌は「いづくにもものし給へるたよりにかあらむ」と大臣が言ったのに対する返事となっている。

問二 歌中の「〜み」は「〜ので」と訳す接尾語である。

問三 ①「のたまふ」は壬生忠岑が代詠で詠んだことを指す。誰の代詠なのか。

②「聞きて」は直前の「忠岑が」の「が」をどう訳すかによって定まる。「が」とそのまま訳すのではない。

③「言ひけり」は「ある人」から求婚の意志を聞かされて、結構なことだと言った人。その後の和歌の詠み手と同一人物。

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

やまとうたは、ひとのころをたねとして、よろづの^①ことのはとぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心におもふことを、見るもの、きくものにつけて、いひいだせるなり。花になく^② A、みづにすむ B のこゑをきけば、いきとしいけるもの、いづれかうたをよまざりける。ちからをもいれずして、あめつちをうごかし、めに見えぬ鬼神^{おにがみ}をも、あはれとおもはせ、をとこ女のなかをもやはらげ、たけきものふのころをも、なぐさむるは歌なり。

このうた、あめつちの、ひらけはじまりける時より、いできにけり。しかあれども、世につたはること
は、C あめにしては、したてるひめにはじまり、D つちにしては、すさのをのみことよりぞ、おこりける。E 神世には、うたのもじもさだまらず、すなほにして、事の心わきがたかりけらし。ひとの世となりて、すさのをのみことよりぞ、みそもじあまり、ひともじはよみける。

かくてぞ、花をめ、とりをうらやみ、かすみをあはれば、つゆをかなしぶ心、ことばおほく、さまざまになりになり F。とほき所も、いでたつあしもとよりはじまりて、年月をわたり、たかき山も、ふもとのちりひぢよりなりて、あまぐもたなびくまで、おひのぼれるごとくに、このうたも、かくのごとくなるべし。

問一 冒頭の一文は縁語を用いた表現になっている。「たね」の縁語はどれか。次のア～トの中から一つ選び、記号で答えよ。(選択肢の言葉は、「たね」を除いて、文中に登場する順序に並べてある。)

- | | | | | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|----|---|---|---|-----|---|---|---|-----|---|---|
| ア | やまと | イ | うた | ウ | は | エ | ひと | オ | の | カ | ところ | キ | を |
| ク | と | ケ | し | コ | て | サ | よろづ | シ | の | ス | こと | セ | の |
| ソ | は | タ | と | チ | ぞ | ツ | なれ | テ | り | ト | ける | | |

【出典】「古今和歌集」仮名序
「古今和歌集」は九〇五年成立の最初の勅撰和歌集。醍醐天皇の勅命で紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑の四人の撰者によって編集された。仮名序を紀貫之が、真名序を紀淑望が書いた。この仮名序は初の組織的な歌論として注目され、後世の歌学に非常に大きな影響を与えた。

重要古語

- ◇しげき 絶え間ない。
- ◇あめつち 天地。
- ◇鬼神 死者の靈魂。
- ◇すさのをのみこと 素戔嗚尊。天照大神の弟。
- ◇わきがたかりけらし 判然と識別しにくかったのに相違ありません。
- ◇かくのごとくなるべし かくような発達をとげたのでありましょう。

問二 傍線部①「ことのは」とはなにか。次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

ア 語 イ 文 ウ 和歌 エ 漢詩 オ ことわざ

問三 [A]・[B]にはどのような語を入れると文意が通じるようになるか。次のア～コの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア せみ イ きりぎりす ウ ほととぎす エ うぐひす オ からす
カ かはづ キ うを ク えび ケ かめ コ われから

A [] B []

問四 傍線部②「もののふ」に当てる漢字として最も適切なものを、次のア～カの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 農夫 イ 漁師 ウ 猟師 エ 武士 オ 盗人 カ 若者

[] []

問五 [C]・[D]・[E]にはどのような枕詞まくらごころばを入れるとよいか。次のア～コの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア ぬばたまの イ たらちねの ウ あらがねの エ あしびきの オ ひさかたの
カ たまほこの キ ももしきの ク ちはやぶる ケ いそのかみ コ あかねさす

C [] D [] E []

問六 [F]にはどのような言葉を入れると文意が通じるようになるか。次のア～クの中から最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア せ イ き ウ し エ しか
オ けら カ けり キ ける ク けれ

[] []

【ヒント】

問一 縁語は和歌の修辭の一つで、意味や音の関連する語を織り込む技法。「たね」は「種」で、その関連語を探す。

問二 「ことのは」は「言の葉」のこと。

問三 [A]の前の「花」は梅の花、[A]はその「花になく」もの。[B]は「みづにすむ」、「こゑ」を出すもの。

問四 「もののふ」の直前にある「たけき」は「勇猛な」の意。

問五 枕詞は普通五音で特定の語を導く。
[C]は「あめ」、[D]は「つち」、[E]は「神」を導く枕詞を選ぶ。

問六 [F]には「ぞ」の結びが入る。選択肢はいずれも過去の助動詞なので、「き」と「けり」の違いを確認する。

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

① あられ降る交野かたののみの狩衣濡れぬ宿かりじろもかす人しななければ

長能ながとよ

濡れ濡れもなほ狩り行かむはし鷹たかの上毛うはげの雪をうちはらひつつ

道濟みちなり

これは、長能、道濟と申す歌よみどもの、鷹狩を題にする歌なり。ともによき歌どもにて、人の口にのれり。

② 後、人々、我も我もとあらそひて、日ごろへけるに、なほこのこと、今日きらむとて、ともに具して、四条大

納言のもとにまうでて、「この歌ふたつ、たがひにあらそひて、今に事されず。いかにもいかにも、判ぜさせ

給へとて、おのおの参りたるなり」といへば、かの大納言、この歌どもを、しきりにながめ案じて、「まこと

に申したらむに、おのおの腹立たれじや」と申されければ、「さらに、^③ともかくも仰せられむに、腹立ち申す

べからず。その料れうに参りたれば、すみやかに承りて、まかり出でなむ」と申しければ、「さらば」とて、申さ

れるは、「交野のみのといへる歌は、ふるまへる姿も、文字遣ひなども、はるかにまさりて聞ゆ。しかは

あれども、もろもろのひが事のあることなる。鷹狩は、雨の降らむばかりにぞ、えせでとどまるべき。霰あられの降

らむによりて、宿かりてとまらむは、あやしき事なり。霰などは、さまで、狩衣などの濡れ通りて惜しき程に

はあらし。なほ狩り行かむと詠まれたるは、鷹狩の本意もあり、まことにもおもしろかりけむと覚ゆ。歌がら

も、優にてをかし。撰集せんしふなどにもこれや入らむ」と申されければ、は、舞ひかなでて出でにけり。

(注) ○はし鷹：鷹の一種。「はいたか」ともいう。

○四条大納言：藤原公任。博学多才で有名。

問一 傍線部①の歌の説明として不適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 「あられふる」の「ふる」は「降る」と「経る」を掛けている。

イ 「交野のみの」の「みの」は「御野」と「蓑」を掛けている。

ウ 「かりじろもぬれぬやど」は「狩衣濡れぬ」と「濡れぬ宿」を掛けている。

出典

「俊頼髓腦」(別名「俊頼口伝」)

平安時代後期、十二世紀前半の書。作者の源俊頼は勅撰和歌集五番目の「金葉和歌集」の撰者。本書は、関白藤原忠実たざねの娘への作歌手引き書として記述されたと言われている。

重要口語

- ◇人の口にのれり⇨人々の話題にのぼった。
- ◇今日きらむ⇨今日こそ決めよう。
- ◇判ぜさせ給へ⇨判定なさってください。
- ◇おのおの(腹立たれじや)⇨どちらのお方も(ご立腹になることはございませんか)。
- ◇その料⇨そのため。
- ◇ふるまへる姿⇨趣向を凝らしている歌全体のあり方。
- ◇もろもろのひが事⇨多くの誤り。
- ◇鷹狩の本意⇨鷹狩の本来のあり方。
- ◇歌がら⇨歌の格調。
- ◇優にてをかし⇨優美であって風情がある。

工 「かりごろも」は「借り衣」と「狩衣」を掛けている。

問二 傍線部②はどのようなことをいっているのか。次のア～オの中から最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 後世の人々が皆、あらそうようにこの歌をくちざんだこと。

イ この後、世の人々がよい歌をあらそって作歌したこと。

ウ 長能・道済の二人が競い合って歌道に精進したこと。

エ 長能・道済の二人が自分たちの歌の優劣を競って譲らなかったこと。

オ 後世の人たちが鷹狩りの題詠歌で優劣を競い合ったこと。

問三 傍線部③の意味として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 今さらどうにもしかなかったありません。

ウ そのようなことは、決してありません。

オ その上さらにも願いがありません。

イ どのようなことでも、かまいません。
エ ますます腹が立ちます。

問四 []に入るものとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 長能 イ 道済 ウ 四条大納言 エ 人々

問五 本文中に述べられている四条大納言の考え方として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 事柄の実態に合うことも大切だが、それ以上に、一首全体の構成や言葉遣いなどの工夫を重視すべきである。

イ 凝った趣向や巧みな言葉遣いもさることながら、題材の性質にふさわしく表現することが大切である。

ウ 構成や文字遣いを工夫し、新鮮な感覚や奇抜な着想を生かす表現を心がけることが大切である。

エ 歌に詠み込む題材は、卑賤ひせんなものや粗野なものを避けて、勅撰集に入っても恥ずかしくないものを選びべきである。

オ 一首全体の構想や表現の工夫も大切であるが、歌を詠む場の雰囲気や乱さないようにすることが一層大切である。

ヒント

問一 掛詞かけことばの不適切なものを探す。掛詞は和歌を訳す際、二つの意味が生かされなければならぬ。

問二 「人々」とはこの後、「ともに具して」行く者たちのこと。

問三 「さらに」は副詞で「さらに」打消の形をとる。直前の「腹立たれじや」という大納言の質問に答えている。

問四 「舞ひかなでて」は、勝負に勝ったことを表している。

問五 「鷹狩の本意」を大納言は重視している。